

---

# 灰色空模様

寧祈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色空模様

### 【Zコード】

N7130A

### 【作者名】

寧祈

### 【あらすじ】

サナとヒロ。もうその組み合わせで呼ばないで。だって、アタシ達もう別れたんだから。

## プロローグ（前書き）

恋愛小説初挑戦です。乙女の恋心って難しいですよね…。

## プロローグ

はつきり別れを告げられた訳じゃない。

なのに君は『付き合つてなんかない』 そう言つた。

そう言われたあの日から、楽しかった中学校生活が灰色に変わつてしまつた。悲しんでる?まさか…。あの人に呆れてるだけ。アタシを理由も無しにいきなりフツたあの人。

友達はまだアタシとアイツが付き合つてると思つてるみたい。前までは照れ隠しで『そんな事ない!』 つて言つてたけど、今じゃ眞実を伝えるために『そんな事ない』 つて言つてる。

『サナとヒロ、付き合つてるんでしょ?』

サナとヒロ。うん、昔はよく会わせて呼ばれてた。仲がいいからつて。でも、もうサナとヒロじゃない。サナはただのサナ、ヒロはただのヒロ。2人はもう別々になつてしまつたから。もう会わせて呼んだつて意味がない…。

『付き合つてなんか、ない

震える唇でそう返す。何だろ?引きずつっている訳でもないのに… 声が震えてしまつのは何だろう?

## 『あつ、コメン』

どうして謝るの？アタシそんなに嫌な顔してた？それとも、悲しそうな顔でもしてた？せいぜいしてるくらいなのに…。

あんなの恋の内に入らない。だつてあんなに短かった。3ヶ月だけ？4ヶ月だけ？まあ、いずれにせよ短い期間。アタシ達の付き合いなんてそんなもの。だからもうキレイさっぱり忘れた。覚えとくような事じゃない。だつてこれからまたイイ人を見つける。

中学校入つて初めての席で、となりに座った人。口は悪いけどカツコイイ。その人を好きになつたつていいんだから。

中学校入つてから優しくしてくれた人。紳士的でイイ人だつた。あの人を好きになつたつていいんだから。

中学校入学前から知つていた、懐かしい顔ぶれの人。可愛くて優しいの。この人を好きになつたつていいんだから。

でも絶対絶対、ヒロだけには恋しない。そう決めていた。絶対絶対絶対、ヒロだけには恋しない。

## プロローグ（後書き）

読んでくださりまして本当に本当に有り難うござります。当の作者は本題に突入する前、プロローグだけでへばりそうです。誰か、こんな僕にアドバイスをください…。

## 1・あいつは恋愛対象外

「おはよう」

アタシが教室に入つていいくと、もう数名のクラスメイトが学校に来ていた。アタシと仲の良い、アコミもいる。アコミはアタシと違つて、今恋をしているようだ。アタシのとなりの席の、ユウトって男子に。アコミがよくアタシの席に来るのは、実はユウトと話すためだという事を、アタシは知つてこる。

「おはよう、アコミ」

「あっ、サナ。おはよ」

アコミ、朝から何をやつしているかと思えば…例のコウトとじやれあつてる。2人はもう付き合つてると同じく、仲が良い。

「2人とも、仲良…」

言いかけたけど、アコミに止められてしまふ。照れ隠しが下手なんだから。

「お、サナ。おはよ」

いきなり後ろから声をかけられた。

アタシの嫌いな…大嫌いな男がそこにいた。

「おはよう…ヒロ」

アタシが顔を引きつらせるのにも気付かず、ヒロは笑つている。本当憎たらしく。ヒロはスポーツ少年。だから恋にもさつぱりしているのだろう。そういうアタシも運動部に入つてはいるけど…アタシの方はあまりさつぱりした性格ではないらしい。

ヒロが机から本を取り出し、広げて読み始める。ヒロには、そういう姿がとことん似合わない。でもなんとなく気になつて、アタシは声をかけてしまう。

「その本、何?」

「ん? コレ? 野球」

やつぱり野球なんだな。ヒロのやつてるスポーツは野球。もちろん昔ながらの熱血部活、野球部に所属。さつきのスポーツ少年、といつのも、正しく言えば野球少年だ。野球なんて何が楽しいんだかアタシには分からぬが、ヒロは暇さえあれば素振りをしている。本当に分からない。なんでこんな人を好きになつたのか…。今じゃ何にも思つてないけど。

「野球つて、そんな楽しい？」

「そりゃまあー、テニスとかバスケとかサッカーとかも楽しいけどや。やつぱり野球が一番かな。それに、野球つて漢字じやん」

「漢字？何の関係があつての漢字なの？」

「何かいひ、母国的な…何かが」

…本当に分からぬ。ヒロの思考回路が分からぬ。

「まつ、やつてりや樂しさも分かるよ。サン、野球やる？俺が球投げてやるつか」

「遠慮しとく。アタシは陸上で充分だし」

「ちつ、そこはノレよな」

なんだかんだ言つて、ヒロと話してるのは楽しい。いつもこの所で好きになつたんだつけ？もう2度と好きにはならぬけど。

じつとヒロを見つめていると、ヒロが露骨に変な顔（敵意むき出し）をした。

「何だよ、『気持ち悪い』

「ぬつやこ」

やつぱり、コイツだけは好きにはなれない。そう、直感した。

## 1・あいつは恋愛対象外（後書き）

1話書いただけで葛藤中です。現在自分自身と戦っています。

## 2・梅雨空模様のアタシ

「好きな人が欲しい」

そう。アタシだって恋くらいしたい。イイ人はたくさんいるといつても、恋にはなかなかつながらないものだ。

「えー、でもサナ、彼氏いるんじゃないの？」

「……いない。誰それ」

はあ、未だにカン違いしてる人がいるようだ。まったく、何ヶ月前に別れたと…いや、つい2週間前か。まだそう思ってる人がいてもおかしくない。

ぼおーっとアコミを眺めていると、

「何？」

「今…女子ってほとんどが恋してるよね」

「そりなんぢゃない？知らないけど」

やつぱり、してる人は恋してる。きっとアタシくらい、恋してないのなんて。

「はあー…」

ため息をつくと、アコミに嫌な顔をされた。

「この梅雨にため息？ますますジメジメするつ

外を見ると、雨がぱらついていた。梅雨、か。アタシにぴったりの時期…かも。

ダメだなあ、アタシ。

ぼーっとしたまま授業（地獄の数学）に突入したら、

「神谷、問い合わせは？」

「…」

「神谷ー、問い合わせー」

「…」

「神谷、おーい」

「…」

姓を呼ばれてるという事に気付いたのは、大分たってから…。鬼教師、松田も呆れ顔だつた。問い3の問題は、アタシの代わりに誰かが解いてくれたらしい。

「神谷、一体どうした？授業中に物思いにふけるとは、賢くないなア」

「はあ…スミマセン」

アタシは松田にこいつてりしぶられ、休み時間後にやっと解放された。数学ではうつかりしてらんない。

「しつかりしる、自分」

アタシは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。が、つぶやきもむなしく、次の理科の授業でも試験管を割るという大失態をしました。しかも、3本一気に。

「ダメじやん…」

アコミに言われた。分かつてる。ダメな事くらい分かつてる。たかが恋愛ijoとさでここまで悩んで、皆に迷惑かけて…。

「サナ？」

黙りこんだアタシを、アコミが心配そうに覗き込む。アコミを心配させちゃ、本当にダメになっちゃうよ…。アタシは顔を上げて、何でもないように振舞つた。

「あははっ、ドジだよね、アタシ」

出来るだけの笑顔で笑う。でも、心は雨模様。

## 2・梅雨空模様のアタシ（後書き）

乙女心ってこんななんでいいんだらうか？と思いつつある僕の小説を読んでくれた方々、感謝です！

### 3・乙女は恋に生きるべし

やっぱアレでしょ？恋愛の一番のお手本は、身近な人の恋でしょ？

「というワケで、アコミ、恋してマスかあー」

アタシのいきなりの質問に、アコミは目をパチパチさせた。

「…は？今度は何考えてんの、サナ」

「恋してマスかあー」

「しっかりしてよ、サナ」

どうどうアコミに呆れ顔をされた。ちょっとしつこかつたかな？  
「アタシは大丈夫だよつ。それよか、アタシ恋したいんだつてば」  
とにかくペースを戻そつとこつ返すと、アコミはますます呆れ顔  
をした。

「昨日もそんな事言つてた」

「乙女は恋に生きる生き物だモン」

「ちょっと可愛いフリ付きで言つてみる。

とにかく、昨日みたいにダメ人間にならないように精一杯恋した  
いのだ。

「へえー、サナみたいな女も恋するんだ」

「そりやあーそうだよ…つて、ヒロ！」

いつからいたのやら、後ろにヒロが立つていた。

「お、乙女の神聖な恋話に入つてこないでよつ」

反論するアタシを無視して、ヒロは

「乙女は恋に生きる生き物だモン、だつてサ…」

と、アタシの真似をしてからかう。

もう、だからヒロみたいな奴は嫌い…。

「サナつて、女子の中で1番『恋』とか『愛』って言葉似合わねえ  
よなー」

「つぬつさこなあ。アタシだって一応女の子なんだからね。恋くら  
よなー」

い…つて、そうだ。ヒロ、好きな人いる?」「へ? 何今の切り返し

「アタシの恋の参考にさせてちょうだいな」

ヒロはにへりと笑って、

「参考になんねえと思うけど?」

「いいよー。てか、いるの?」

「いるいる。すっげえ好きな子」

ふうん…もう好きな人が新しく出来たんだ…。いいな、立ち直り早くて。

「誰? クラスの女子?」

「それは言わない」

「ええーっ、それじゃ参考になんないよ」

周りからも、ブーリングが飛ぶ。ここまで来て言わないのは反則(何の反則だか知らないけれど)なのだ。

「だつて…絶対俺嫌われてるし。叶わない恋を口に出すようなマネはしないぜ…ふつ」

「…ふつ、じやない。すっごい氣になる。めつむぢや氣になる」

アタシが追求すると、ヒロはぱつと何かを思いついたように明るい表情を見せた。

「サナにも好きな人が出来たら教えてやる。その代わり、サナの好きな人も教える事…ってのはどう?」

「交換条件、て事?」

「そゆ」と

悪くないじゃないか。ヒロの好きな人も気になるし…。

「アタシ乗った」

「へつへー、早く好きな奴作れよ」

言われずとも、そうするつもり満々。

よおーし、今日からアタシの本気モードの恋をしてやる! じやないの。

### 3・恋に生きるべし（後編）

やつはとんでも妄想です、心境なんかは。貴様、どうぞダメ出し  
お願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7130a/>

---

灰色空模様

2010年10月12日22時08分発行